

モード・ダイヴァーの帝国主義幻想（その1）

—『遠くを探し求めて』、『詩人が通る』、『夢は果てしなく』の混血主人公をめぐる—

小西真弓

序

イギリス人とインド人の混血といえば、帝国主義時代の英文学の中では、「半カースト」(half-cast)、「雑種」(half-breed)あるいは「ユーレイジアン」(Eurasian)等の呼称が示唆するように、¹⁾ イギリス、インド双方から差別される対象であり、とりわけその男性が好ましい人物として描かれることは稀であった。彼らが時に英雄的行為をなすとすれば、それはあくまでも「イギリス人の血」のおかげで、インド性は彼らを優柔不断な怠け者、あるいは文明人から野蛮人に退化させる要素である。相容れぬ二種類の血の葛藤は、混血の精神を不安定にするばかりか、しばしばキリスト教信仰や西洋教育を無効にするような犯罪的行為の引き金にもなっている。彼らが、どっちつかずの信用の置きぬ人物としてステレオタイプ化されたのは、人種隔離政策を推進する上で不都合な混血を排除するためであろうか。18世紀末に東インド会社が奨励した異人種間結婚によって生まれた混血が純粋なイギリス人の数を上回り、イギリス化教育を受けて支配者と被支配者の境界を不明瞭にしたとすれば、植民地支配にとって彼らが脅威となったことは想像に難くない。あわてた植民地政庁による異人種間結婚の禁止（1835年）にもかかわらず、夥しい数の混血が存在したという実情は、イギリス男性のモラルの問題とも言えようが、インドへ渡ったメムサーヒブ（イギリスの女主人）たちは、憤りの捌け口を同胞の男性ではなく、魅力的なインド女性や混血に求めざるを得なかったようである。それは彼女たちが描く異人種間のロマンスが、ごく少数を除いてハッピー・エンドにいたらず、混血の赤子も都合よく抹殺されがちなことから窺い知れる。

このような混血差別の典型と見なされる『風の中の蠟燭』(*Candles in the Wind*, 1909年)

1) イギリス人とインド人の混血に対する呼称は地域や年代により様々であり、差別的なものも少なくない。ヨーロッパ人とインド人の混血を意味する「ユーレイジアン」(Eurasian)たちは、1911年から「アングロ・インディアン」とか名乗ることが認められたが、この言葉は英領インドに駐在したイギリス人たちの名称でもあり、現在でも学問領域では彼らを指すことが多い。本稿ではダイヴァーにならって、「アングロ・インディアン」はインド駐在イギリス人たちを指すことにしている。インドの欧亜混血の呼称に関しては、*Hobson-Jobson: A Glossary of Colloquial Anglo-Indian Words and Phrases, and of Kindred Terms, Etymological, Historical, Geographical and Discursive*, ed. by Henry Yule and A.C. Burnell (New Delhi, Munshiram Manoharlal, 2000) 344参照。

でユーレイジアン²⁾のヴィデルを「両人種の最も悪いところを受け継いだ」アンティヒーローとして破滅させたダイヴァーが、『遠くを探し求めて』(*Far to Seek*, 1921年), 『詩人が通る』(*The Singer Passes*, 1934年), 『夢は果てしなく』(*The Dream Prevails*, 1938年)の中で、混血主人公のロイ・シンクレアを極めて好ましい人物として描き、最終的にインドからイギリスの白人社会へ包摂して救ったのは何故であろうか。本稿では物語の舞台が設定された第一次大戦前後の時代の変化を考慮しつつ、矛盾したダイヴァーの人種観を考察してみたい。

I

東洋画家のイギリス男爵ネヴィル・シンクレアと、ラージプート族のクシャトリア階級に属するインド女性ライラマニの間に生まれたロイは、サリー州にある大邸宅で長男として大切に育てられ、パブリック・スクールからオックスフォード大学へ進学するエリートとして成長する。色白で生粋のイギリス人と見分けがつかない外見をもつ彼は、級友から混血故にいじめられて劣等感を植えつけられることはなかった。近所には母親と親しく付き合うイギリス女性デスパード夫人や、その娘で「腕輪で結ばれた兄妹」として契りを結んだ遊び友達のタラもいた。彼の幼少期に不幸な影は見当たらない。しかしロイはインド人の学友チャンドラナスがいじめられる小学校や、帝国主義的な英雄が崇拜されるパブリック・スクールになじむことができず、級友たちと自分の「違い」を意識するようになる。情操豊かなインド人の母親に育てられたロイには、学校生活よりも家庭でタゴールの詩を朗読するほうが楽しかった。唯一の学校友達と言えば、チャンドラナスを人種差別的な悪童の暴力から救ったアングロ・インディアンのランス・ディズモンドぐらいで、彼には自分が混血であることを打ち明け、母親を紹介する気にもなった。

少年期のロイの内気な性格や趣向を分析してみると、彼には母親譲りのインド的要素が投影されているという印象を受ける。なるほど彼がラジャスタンの神話や、自然との共生や真理の探究を説くタゴールの詩に憧れるのは、東洋画家の父親や母親の教育によるところが大きい。それらが彼に内在するインド性になじむからとも言える。「インドに属する」というランスの言葉にロイが親近感を覚えるのも、当地と血統的な繋がりがあるためで、母の故郷ラジャスタンは異郷ではあっても、心のふるさとのように感じられた。ライラマニが語るラージプート族のムガールの大軍を相手にした武勇伝には血が沸き立つ思いさえする。またジャイプールに住む祖父のラクシュマン、オックスフォード大学に留学中のいとこのダヤンやアルーナは、ロイにとってかけがえのない親族である。成人した彼が母方の親戚を頼ってインドへ旅立とうとするのも、当地から小説家になるために必要なインスピレーションを吹き込まれたいとの思いからであった。そんな願望を抱く彼の内面を、父親の友人で小説家のブルームは次のように観察する：

2) Maud Diver, *Candles in the Wind* (Edinburgh, William Blackwood & Sons, 1911) 45. このような考え方については、Rachel M. Fleming, "Human Hybrids: Racial Crosses in Various Parts of the World", *Eugenics Review* (January, 1930) 257 参照。

少年だった頃と同じように今もロイの姿形は、父親のネヴィルに生き写しだ。しかしブルームの鋭い目には、ロイに東洋の気質が——彼の内に相反する力の葛藤から生じる瞑想的な静寂が漂っているように映った。彼が笑ったり、お喋りをする時はそれは消えた。沈黙する時は彼は周囲から遊離して、またその雰囲気帯びた……どちらが本当のロイなのか、どちらが彼の宿命的な窮地での決定的な要素だと判明するだろうか。いにしへのインドの魂は、どれほど彼を高みに引き上げ、どのような深みに引きずり込むであろうか。インドは——若い彼がインドを称えることは、彼にインスピレーションを吹き込むのか、あるいは彼を躓かせる石になるのだろうか。（F.S., 68-69）

ロイにインド性が内在することは無論、両親にとっても自明の理である。しかし、彼らにはそれがイギリス性と葛藤を起こし、「彼を躓かせる石」にもなるとは予想できない。インドで混血故に彼が憂き目に会って絶望することも想像し難かった。二人が単身でロイをインドへ旅立たせることに不安を抱くのは、彼がインドの虜になってイギリスの男爵家を継ぐことを放棄したり、インド女性を妻に選ぶことを懸念したからである。ネヴィルには、ロイがオックスフォードで東西の文学を学んで、インド専門の小説家になろうとするのは、「東を西に紹介する」インド専門画家の息子としては当然の選択のように思えた。またライラマニにしてみれば、彼がインドを第二の故郷のように思ってくれることは無上の喜びである。彼女がロイのインド行きをネヴィルに承諾させるのは、それが本人の将来に役立つためばかりではなく、彼のような両民族の最高レベルの混血が、不穏になりつつあった当時のイギリスとインドの関係を修復するという希望的な観測を抱いたからであった。そのような見解はロイの誕生後、あるキリスト教徒のインド婦人がライラマニに宛てた手紙の中で、次のように述べられている：

「私は愛する祖国インドで深刻になっているユーレイジアンの問題をいくつも目撃し、悲しんでおります——その問題は多くの場合、イギリス、インド双方の低いカーストどうしの無分別な結びつきによって生まれたので、ユーレイジアンをより一層低いところに引き下げようような不名誉な感じを伴います——しかし、あなたとあなたのネヴィルさんに関しては——私は全く不名誉なことだとは思いません。多分お様がたにとっては、精神的に得るものが多くあるでしょう。なぜなら私はイギリスもインドも心から愛しているからです。神は私の愛する双方の国に、いつの日かインドはあなたの方のような結婚から生まれた子息によって救われるという未来像を授けて下さったのです。息子さんにはハンディキャップを負うことによる強さと、東洋の魂と西洋の不屈の精神をもつ人格が備わるでしょう。そしてイギリスとインドを結びつけるという仕事に、双方の国に対する理解をもって人一倍の愛情を注ぐでしょう。イギリスのインド領有の最終的な意義がこのようなものであったらどうでしょうか。つまり、仏陀の後継者が高潔な魂をもった高カーストのイギリス人とインド人の両親から生まれた人間、即ち東洋と西洋の最も洗練された融合であってもよいのではないのでしょうか。（F.S., 130）

この手紙に反映されている異人種間結婚観と同様、ネヴィルとライラマニは周囲の好奇心な眼差しに曝されることはあっても、自分たちの結婚を「不名誉」であるとは思わなかった。二人にとっては、ラクシュマンが述べるように高カーストのラージプートは、イギリス人と共通の先祖であるアーリア人の血をひく民族であり、両者の結婚は東西文化の融合を象徴するもので許容されるべきであった。そんな両親の間に生まれ育ち、イギリスのジェントルマン教育を受けたロイが、自分をユーレイジアンあるいは半カーストの同類と見なすことはで

きないのは当然であろう。彼はラホールのイギリス人クラブで、ダンスの相手がいない「コーヒー牛乳色の顔」をした混血女性を気の毒に思っ一緒に踊るが、当地で目撃した数多くのユーレイジアンたちには「おおいに同情するが、心の奥底でかすかな嫌悪感を覚えた」。ロイには、彼らが「人種的に中間地帯に住む哀れなどつつかずの人間……特定のカーストに属さず、鉄道や郵便局の小役人たちで、多かれ少なかれ同類の下層部に住んでいた」半カーストであるなら、上層階級の混血の自分は「二重カースト」だった。(F.S., 298)。確かに、精神的・肉体的に虚弱だと言われるユーレイジアンとは違い、³⁾ロイにはパブリック・スクールで培われた男らしさも忍耐強さもあつた。下層階級のイギリス人が陥る深酒や賭博癖とも縁がない。また、いかに彼がインドの親族の問題に関わったり、チトールの城跡で母親や先祖の霊を感じたとしても、彼の性格には「野蛮で衝動的」とか「迷信的」、あるいは「好色」といったようなインド人に特有とされる否定的要素は全く感じられない。このことは彼が、アルーナに投石して足を捻挫させた反英分子チャンドラナスを成敗するダヤンに野蛮性を感じて、自分との隔たりを意識する様子から理解される：

頭に血の上ったラージプートのダヤンは向こう見ずなまでに思い切ったことをする。思慮分別や情けに訴える拙い説得には耳を貸さない。彼の刀は探し出した犠牲者にぐさりと突き刺さるまで満足しない……チャンドラナスや他の仲間の命令でダヤンはデリーの長官に——後に総督邸で数回会った時にその強くて物分かりの良い長官の言葉や風貌から感銘を受けたのに——ためらわずに爆弾を投げつけたかもしれない……ダヤンがもしイギリス人だったらケガをしているチャンドラナスを襲って目的を果たすようなことはしなかっただろうに。だが、ラージプートのダヤン・シンはスポーツマンの道徳規準によって制御されなかった。殺害するために突進した。彼の頭は即座に本能的に働いた。素早い行動が伴った。ダヤンはロイほど想像を張り巡らすことができない。良心の呵責が彼の精神を乱すこともない。彼はアルーナの仇を10倍返しにして討った……自分とダヤンは同じ年頃で血縁なのに、何百年もかけ離れているように感じられた。(F.S., 276-77)

ダヤンがオックスフォード大学に留学したことを考えると、彼と紳士的なマナーや冷静沈着な判断力を備えたロイとの違いは、生まれや「血」の問題なのであろうか。それはさておき、イギリスの読者にとってロイがダヤンよりも好ましい人物に感じられるとすれば、その理由は前者にラージプート特有の欠点がないばかりではなく、その「二重カースト性」が大英帝国の維持のために役立つからでもあろう。とりわけロイが第一次大戦勃発時にインド行きを後回しにして、イギリス軍に志願したエピソードには、彼の内面にイギリス人の騎士道精神とクシャトリアのラージプート魂が混在していることが反映されている。参戦は彼にとって「イギリスとインドを結びつけるという仕事」の一部のようにも感じられたのであろう。ロイは、「全く軍人魂のない」父親が「高い身分に伴う義務」(noblesse oblige) から大佐になったことに刺激され、「戦士精神をイギリス・インドの両民族から受け継いでいることに俄かに目覚めて」自分も出征することを決心する：

3) ユレイジアンの心身の問題については、Robert Young, *Colonial Desire: Hybridity in Theory, Culture and Race* (London, Routledge, 1995) 142-150参照。

……何代にも渡って詩人かつ軍人だったという関連は、戦時下に再確認される。ロイは内にあるラージプート性によってその民族の名にふさわしい唯一の戦闘方法を確認した。人と馬、剣の三つの取り合わせだ……大英帝国全体が一丸となって、共通の危機、同じ敵、同一の目的を打ち鳴らして迎撃しようとしている時に、若い自分の私事は何の役にも立たない。（F.S., 132）

このような気持ちを抱いたロイは、「戦いに挑む時にはラジャスタンのチトールを思い出すように」という母親の言葉に拍車をかけられ、長期にわたって戦場の修羅場をくぐり抜ける。数多くの辛酸をなめつつ、彼は帰郷の折にも家族に弱音を吐くことはなかった。肉体的にも、厳しい環境に耐えた彼には混血の特徴とされる「疾病に対する抵抗力が低い」⁴⁾ というハンディキャップはない。ロイの「細やかな神経と小柄で引き締まった体格」は、「馬術にかけて骨の髄までラージプートである」（F.S., 133）ことを象徴すると同時に、イギリス軍の騎兵として名を馳せるためには有利だった。ランスと共に彼がメソポタミアの収容所を脱出できたのも、ラージプートゆずりの頑強な肉体と父親から受け継いだ「西洋の不屈の精神」の賜物であった。

II

イギリス軍の士官として参戦し、戦争のために家族を犠牲にしたロイが、インドへ渡った後にランスの所属するアングロ・インディアン社会で客人扱いされるのはもっともなことであろう。しかし皮肉なことに、彼はインド統治に関してイギリス支配者側に組することによって、自らの二重カースト性が両義的な意味をもち、自分を「躓かせる石」にもなることを認識するようになる。

ロイにとって、インドはヒンドゥー教徒やイスラム教徒の国ではあるものの、イギリスに支配されるべき大英帝国の一部に思われた。祖父や母親が信じるように、イギリスはインドに西洋文明の恩恵をもたらし、野蛮な信仰や風習から原住民を救い上げる文明の使徒であるはずだった。イギリスから独立を求めるガンジーらの国民会議派は少数の自分たちだけの利害しか念頭にない夢想家にすぎないのではないか。民族や宗教が複雑に入り組んだインドは、彼らのように国内の治安を乱す輩よりも、ランスのように命がけで大英帝国の秩序と平和を守るアングロ・インディアンに統治されるべきであろう。目の当たりにした原住民の貧しく悲惨な状況も、両国の悪化した関係を象徴するような忌まわしい事件も、イギリス側の統治体制というよりはむしろ迷妄なインド人の性格やカーストに縛られた社会構造に問題があるに違いない。「イギリスとインドを結びつけるという仕事」にとって、まず必要なのは両国が運命共同体であることを周囲に納得させ、双方に「友好的な感情」を取り戻すことであった。そのような見解を抱いた彼は、ダヤンが過激なナショナリストになったチャン

4) この点に関しては、谷口虎年著『遺傳・體質・混血』（吐鳳堂、1939年）99頁；Edgar Thurston, "Eurasians of Madras and Malabar; Note on Tattooing; Malagasy-Nias-Dravidians; Toda Petition", *Madras Government Museum Bulletin*, vol. II, no.2 (1898; rpt. New Delhi, Asian Educational Service, 2004) 89-91 参照。

ドラナスに取り込まれたことに憤り、祖父のコネクションやラージプートへの変装術、巧みなヒンドゥー語を駆使してデリーへ乗り込み、彼らの居所を突き止める。「想像を張り巡らすこと」ができるロイには、ダヤンがタラに失恋したことでイギリス人全体を逆恨みし、チャンドラナスにそそのかされて反英活動に引きずり込まれた経緯は容易に察しがついた。また親族としてその愚かさをダヤンに悟らせるのもさほど困難ではない。合意した二人は命からがらチャンドラナスのアジトを逃げ出し、祖父のもとへ無事に帰還する。

人種差別に憤るダヤンやチャンドラナスにロイは個人的な同情も感じるが、大英帝国の平和を乱して死傷者を出すような政治活動は許せなかった。ローラット法の施行に怒ったラホールの群集が暴徒化するのを目撃した彼は、非常時にはランスの軍隊を補佐する特別士官として鎮圧に加わろうとするほど、政治的には帝国主義体制を支持する。このことは、インド人側に1500人以上の死傷者を出した、アムリツァルのジャリアンワラー・バグにおけるダイア将軍の武力弾圧について、⁵⁾ 彼が次のように語るということからも明らかである：

ここアムリツァルではもうトラブルはありません……軍事法の手続きが見事に進められています……しかし間もなく、惑わされた可愛そうな町の乞食たちはガンジー派に熱心に声をかけたように、「軍事法万歳」と叫ぶようになるでしょう。僕の仲間の一人は「我々の臣民は新しいこの委員会による自治とか、委員会による政府という話が何のことかわかっていない。あまりに沢山の命令は混乱を招くばかりだ。しかし彼らは上からの命令による政治という言葉は理解できる」と言っています。実際にパンジャブでは、迅速な行動がインドを安定させるというのが一般的な意見です——少なくとも現在のところは。(F.S., 394)

親英派の祖父やアングロ・インディアン社会に庇護されるロイが、反英集会の武力弾圧を黙視するのはさほど不思議ではないかもしれない。貧しいインド人と関わりをもたない彼には、帝国政府の搾取のシステムを理解することも不可能であろう。しかし、このジャリアンワラー・バグの事件が「インドを安定させる」どころか、実際には反英的な民族主義運動に拍車をかけたことや、東西の融和を説いたタゴールが怒ってイギリスから授かった爵位を返還したとなると⁶⁾ 上記のような発言をするロイ（即ち作者）には、イギリス帝国主義の否定的な側面やインドのナショナリズムに対する大局的なヴィジョンが欠落していると言わざるを得ない。もっともロイを通してイギリス人のインド嫌いを批判し、個人的なインド

5) この事件に関し、ダイヴァーは「作者の注」の中でインド人側に多数の犠牲者がでたことに遺憾の意を示していない：

私の著書には1919年4月のラホールで勃発した事件の場面がある。それ故、物語の主要な事件は事実に基づいているが、関係者はイギリス人インド人双方とも全くの想像の人物であることを明言しておきたい。同時に私が描いたインド人の登場人物が表明する意見は、実際には彼らがイギリスに忠実あるいは不満であったに関わらず、現存のインド人がその場に応じて書いたり述べたりした内容に基づいている。他の場所では多数あったかもしれないが、ラホールでは重傷を負ったイギリス人はいなかった。私は自分の物語のために、イギリスにあって、そのように想像した。他のすべての点に関しては、記録された事実に近い。

このようなダイア将軍を擁護する見解に関して、マーガレット・マクミランは、イギリス女性たちをインド人の暴徒が襲撃するという噂が流布したことを指摘している。Margaret MacMillan, *Women of the Raj* (New York, Thames and Hudson, 1988) 225-26参照。

6) Harish Trivedi, *Colonial Transactions: English Literature and India* (Manchester, Manchester University Press, 1993) 59-60参照。

人との友愛を強調する作者には、一般的なメムサーヒブ以上にインドへの愛着があったとは言えよう。また彼女が帝国主義を支持したのは、インド女性の解放を願ってのことでもあった。そのような作者の信条は、『詩人が通る』に登場するミッシヨナリー・ドクターのグレイス・リンチが「新しい女」タイプの女性であるにもかかわらず、ロイがインドの少女妻を救う彼女の計画に協力するエピソードに浮き彫りにされている。

インドでロイが傍目を気にせず救うべき対象は、親族のダヤンばかりではなく、カーストの因習のために老人との結婚を強いられたランジーニやジャイプールの乞食母子等も含めた土着の人々である。彼の目には実際にインド女性の解放に努力しているのは、「インド女性のため」という大義を都合よく利用するだけで、ヒンドゥーの相続や婚姻法に触れない帝国政府の役人やインドの民族主義者ではなく、オードレイやグレイス・リンチのような「白人女性の重荷」を荷うイギリス女性のように映った。グレイスの夫で警察長官のジョンはインド女性の教育には無関心で、アルーナや彼の妻がランジーニを婚家先から脱出させることは「誘拐」であり、高カーストのインド男性の反英感情を煽ると反対するが、ロイは彼女たちと同様にランジーニ本人の幸せを優先的に考え、彼女の救出に協力する。ランジーニのような優れた知性をもつインド女性の解放こそがインド問題の解決に繋がるというのが彼の信念だった。ロイがガンジーを嫌うのも後者がヒンドゥー主義者でインドの女性問題に関しては保守的な態度を示したからであるとも考えられる。⁷⁾ とすれば、イギリスの帝国主義には批判的であっても西洋文化をインドに必要なものと見なし、女性の地位の向上に貢献したと言われるタゴールを彼が称讃するのも納得できる。⁸⁾

III

ロイのインドの女性問題への「二重カースト」的なアプローチは、彼が帝国主義を支持する一方で、インドを救うのはインド女性のスワデシ（独立）精神だと主張することにも抽出されている。そのような見解は過激な民族運動やフェミニズム運動にインド女性が加わることを認めるものではなく、彼女たちが家族や他人の幸福のために尽くすヒンドゥー女性の美徳を保ちつつ一人の人間として生きる権利を獲得することを勧めるもので、彼が母親のようなインド女性を愛する気持ちから生じたものである。彼には長年の因習による抑圧に耐えてきたインド女性は精神的に強い存在であり、彼女たちを教育することによって迷妄の世界から救い上げれば「より洗練された類のインド男性も生まれる」（S.P., 478）はずであった。教育の普及によるインド女性の因習からの解放は、イギリス支配者の重要な使命であり、その達成によって両国の関係も改善されるように感じられた。しかし、教育を授けられてスワデシ精神に目覚めたインド女性たちの中には、インドの自治を認めないイギリスに反旗を翻し

7) この点に関しては、ジョアンナ・リドル、ラーマ・ジョーシ著、重松伸司監訳『インドのジェンダー・カースト・階級』（明石書店、1996）71頁参照。

8) タゴールの女性観は、我妻和男著『タゴール：詩・思想・生涯』（麗澤大学出版会、2006年）226-30頁参照。

たり、アルーナのように結婚に関してはイギリスとインド双方の社会から疎外された者も少なくなかった。彼女たちの状況は、帝国主義の人種差別や女性問題に関する矛盾が生み出したもので、物語ではロイとアルーナの関係に投影されている。

ライラマニと比べると、アルーナは色黒で顔立ちも十人並みである。しかし母親を失って以来、ロイは彼女の面影を感じさせるアルーナに親近感を覚えるようになる。そのために、アルーナがイギリスへ留学したり医療活動に携わることで、ジャイプールの親族からアウトカースト扱いされて、祖父の家の台所に立つことも許されず、適齢期を過ぎて結婚相手が見つからないことに同情を禁じえない。インド女性の解放を訴え、カーストの掟破りの結婚をした女性活動家サロジニー・ナーイドウ (Sarojini Naidu, 1879-1949)⁹⁾ へ彼女が傾倒するのも尤もな話に思われた。そのような気持ち抱いて彼が、親族として付き合うアルーナに恋愛感情を抱くようになるのもごく自然な成り行きといえる。アルーナにしても、自分の立場に理解を示すロイは心の空白を埋めてくれる唯一の存在であった。二人は共通の先祖が住んだアンベールを訪れた際に、ロマンチックな気分になって男女関係に陥りそうになる。しかしアルーナの誘惑に屈することは、ロイにとって「インド女性を妻にしない」という母親との誓いを破ることであった。彼女を妻にすることは男爵家の後継者の自分には不適切であり、「彼女にとっても適切ではない」。上流階級のイギリス人としての認識は、「彼女を受け入れろという彼の東洋性」(F.S., 269) を克服し、ロイはアルーナと唇を交わす以上の関係を思い止まる。

ロイやライラマニの「インド女性を妻にしない」という意向が、イギリス帝国主義に組み込まれた二人の心性を反映するものであることは否定できない。しかし彼らがそのような気持ちになるのは、イギリスとインド双方で異人種間結婚がいかに白眼視されるかを認識していたからでもある。このことはライラマニの母親で頑迷なヒンドゥー主義者マタージがロイを孫として歓迎しないことや、彼が幼い頃にインド帰りの少年ジョー・ブラッドレイから、次のように母親を侮辱されるエピソードに示唆されている：

「おい、ちょっと！ あそこに君の別嬪のインド人乳母がデスパード夫人と歩いてるぜ。インド人乳母にしてはいかしてるなあ。インドから連れて来たのかい。君はインドに行ったことがあるなんて言わなかったぞ。」

ロイはぎょっとして体中が熱くなった。「うん、行ったことはあるよ。ちょっとだけ行ったよ。でもあの人は乳母なんかじゃない。れっきとした僕の母さんだよ！」

ジョー・ブラッドレイは目と口を開けて、もっと露骨な態度をした。

「何ってこった！ 何て話なんだ！ 白人の母親がインド人乳母であるはずがないよ。僕のいたインドではね、君のパパはそこで結婚したと思うけど？」

「そうじゃない。言ったじゃないか、彼女は僕の乳母じゃない」……

「母さんは正真正銘のお姫様なんだ。だから！」

しかしその悪童は、感心するどころか、この上もなく無作法に笑うだけであった。(F.S., 25-26)

インドへ渡ったロイがアングロ・インディアンの社交界の仲間入りをしたのは、以上のよ

9) サロジニー・ナーイドウの伝記的事項については、*Encyclopaedia of Asian Civilizations*, ed. by Louis Frederic (Paris, Jean-Michel, 1979) vol. 67, 18 参照。

うなジョー・ブラッドレイの発言が、父親ネヴィルの言うように「召使や店番のインド人にしか会ったことのない」イギリス人のインド人観を反映しているという思い込みによる。ロイには、上流階級のインド人までが人種差別の対象であるとは予測し難かった。なるほど、インドに到着後、彼はアルーナや自分のことを兄弟姉妹のように気遣ってくれるラーンスの親族やラホールの総督シオ・レイに人種差別を感じることはない。祖父ラクシュマンは勿論、一度は反英分子の仲間入りをしたダヤンでさえ、総督邸の客人としてもてなされるほど、高カーストのインド人とアングロ・インディアンは友好的に感じられた。しかしラホールの社交界に招待された彼は、次第にジョー・ブラッドレイのような人種観が多くのアングロ・インディアンに通念であることを悟るようになる。ラーンスが社交界のパーティーでアルーナやダヤンのことを話題にしないのも、「原住民にはぞっとする」とか「インドは恐ろしい虚飾の国だ」(F.S., 296) というイギリス人たちを意識してのことであった。ロイにラジャスタンからパンジャブへ移ることをラーンスや彼の姉シーアが勧めるのも、アルーナとの間に距離を置かせるためである。英領インドで「白人」としてのアイデンティティーを保つために、ロイはインド人の親族よりも、アングロ・インディアンとの付き合いを優先しなくてはならなかった。

ラーンスの誘導でラホールの社交界に溶け込んだ彼は、アングロ・インディアンへの偏狭心に嫌気がさしつつも、「イギリス紳士」として歓待されることには心地よさを禁じえない。但しその心地よさは母親のことに触れないという条件付きのものであった。「二重カースト」とはいうものの、「平均的なアングロ・インディアンが自分とユーレイジアンとの差を理解できるかどうか、彼には全くわからなかった」(F.S., 298)。そんな彼は、長官代理の養女ローズ・アーデンとの結婚問題によって、「二重カースト」も英領インドにおいてはユーレイジアンと同一視されることを悟り、自らのアイデンティティーに自信を喪失する。

IV

ロイがラホールのイギリス人社交界で知り合ったローズは、母親のエルトン夫人と同様、インドの文化や原住民には興味がなく、「給料、出生、名誉」を念頭に結婚相手を探し求めるメモサーヒブの典型である。男心をくすぐる手練手管にたけ、求愛者を天秤にかけるようなモラルの低さにもかかわらず、彼女の美貌とダンスの技には帝国軍人の鑑のようなラーンスまでが魅せられる有様だった。ラホールに舞い込んだロイが彼女のターゲットになるのは、アングロ・インディアンにはない彼の洗練された雰囲気と男爵家の後継者という社会的地位の故である。「インドが近いうちに白人のための国ではなくなる」(F.S., 317) と感じていた彼女の目に、ロイは本国で二流紳士扱いされるアングロ・インディアンの軍人や文官よりも、結婚相手として魅力的に映った。

女性に疎いロイが、「芸術家の審美眼を満足させる」美しいローズに接近されて、男性としての本能に目覚めるのも不思議ではない。彼はインド人に対する見解について彼女との相違を感じるものの、原住民の暴動には毅然とした態度を取る彼女に気脈を通じるものを感じ

る。パンジャブの不穏な空気の中で、ロイはローズの「騎士」となり、付き合い始めてからわずかに六週間で婚約に漕ぎ着ける。しかし、ローズは彼から混血であることを打ち明けられ、彼との結婚をためらう。二人の結婚に猛反対するようになった母親には、「ロイはラージプート女性の息子でも、ほとんどすべてにおいてイギリス人である」(F.S., 397)と抗弁するものの、「本能的に混血を嫌う」気持ちは拭いきれない。それでも一人の女性として恋愛感情を抱いたロイへの未練もあった。そんな彼女の心情を察した母親は、次のように生まれてくる子どもの問題を持ち出して娘の心変わりを促す：

「二人の人間が愛し合っているというのは、とても素晴らしい話だこと。ロイは半カーストなのよ。それは、わかりきったことだわ。あなたは、教育と血統が別物だという忌まわしい事実から逃れられないわよ。それに——あなたは、相手の男のことしか考えていない。でも、自分の大切な最初の子どもが土人のように色黒になるかもしれない覚悟はできてるの。ありそうなことよ……」

……「もう一つ言うておくわ。どんなお医者さんも、こういう雑婚から生まれた惨めな子どもの半分のある特殊な結核が、天国へ連れ去ると言うわよ。そうなるのは神の御慈悲かもしれないけれど。でも自分自身の子どものことだと思いなさい……それにあなたにはわかっているだろうけど、混血が精神的に墮落するってこと——」

「ロイに限ってそんなことはないわ。」ローズはさらに熱っぽくなった。

「お母様にはそういうことが環境や、恥辱、両親の種類によって生み出されることはわかっているでしょう。何でもお好きなようにおっしゃって下さい。私はもう大人です。彼と結婚するつもりです」……

もし必要ならローズは、ロイを怒らせないように自分が母親の態度から縁を切ってもいいと言えるかもしれない。とはいえ彼女の母は、脳裏に焼きつく憎むべき事実かもしれないことを言った。

(F.S., 398-99)

母親の混血差別に反駁しながらも、ローズが最終的にロイとの結婚を思いとどまるのは、ロイ本人への嫌悪感ではなく、色黒の子どもを生むことへの恐怖感からである。この混血による「先祖返り」の問題は、物語の設定年代に流布した遺伝学や優生学を反映するものであり、当時のアングロ・インド小説ではしばしば異人種間のロマンスに水をさす論拠にもなっている。作者自身がこの問題に拘りをもっていたことはロイの父親ネヴィルが、姉から「たとえロイが純血のイギリス女性と結婚しても、生まれてくる息子がインドの先祖帰りをする可能性がある」(F.S., 113)ことを指摘されてたじろぐ様子や、彼女の警告通りロイとタラの間にも生まれた三人の子どもの一人、ヘレンが「色黒」と描写されていることから窺い知れる。それは遺伝の法則にかなうもので、自然の摂理とも言えようがイギリスの白人至上主義者にとっては誠に都合の悪いことであった。そのために、イギリス女性にとって「白人として通る」ユーレイジアンが危険視され、インド人以上に嫌われがちであったと思われる。またゴビノーが唱えたように、¹⁰⁾ 何代にも渡る混血が人種の退化をもたらすと仮定されたなら、ライラマニやネヴィルが「インド人女性を妻にしない」とロイに約束させるのも、単なる社会的なインド人差別ばかりではなく、優生学上の問題が背景にあるとも言える。即ち、一代限りのイギリス人とインド人の混血はゴビノー説のように、シンクレア家に文化的な恩

10) Arthur de Gobineau, *The Inequality of Human Races*, trans. Adrian Collins (New York, H. Fertig, 1967) 24-25, 90-105 参照。

恵をもたらしたが、さらなる「黒い血」との混交は、大英帝国の男爵家を人種的に退化させる可能性があるので避けるべきであると考えられた。有色人種と接触する機会の多い英領インドにおいては、このような見解はとりわけ優秀なアングロ・サクソン人種を生み育てるべき性であるムムサーヒブたちに吹き込まれた。この点に関してアン・ストーラーの次のような指摘は参考になる：

植民地のヨーロッパ人共同体に従属して、その安泰や結束を支持するように束縛されたヨーロッパ女性たちは、人種の境界を明確にして植民地の事業を推進するために不可欠な存在であった。人種の退化を深く憂慮するようになった本国のブルジョワの言説によって、彼女たちをそのように帝国の枠組みに位置づけることは、20世紀への転換期により強調されるようになった。中産階級の道徳、男らしさ、母性は危険にさらされていると見なされた。それは科学的に解釈された人種差別主義が、雑婚や人種の退化を恐れる気持ちと密接な繋がりをもつ見解だった……

もしイギリス人の人種的退化が、労働者階級の母親の道徳的邪悪さや無知の結果と想定されたなら、植民地ではその危険はより浸透力があり、人種の汚染の可能性は高かった。ヨーロッパの支配を確実にするために二方向へ進める案が出された。一つは、曖昧な人種の類を防ぎ、家庭の取り決めに明白にすること。もう一つは、より明瞭なヨーロッパの基準を設定すること、つまり雑婚を避けて白人との同族結婚を選ぶこと、同棲をやめて法律上の結婚をして家庭を作ること……¹¹⁾

「黒い血」を恐れてインド人との結婚や同棲をタブー視したイギリス側の政策は、ヒンドゥー教徒の因習を守る高カーストのインド人には好都合であったかもしれない。彼らにとって、息子や娘がカースト外の結婚をすることは不名誉極まりないことであり、物語の中ではマタージの娘の結婚に対する憤りがそのような心境を浮き彫りにしている。しかしイギリスに留学して西洋教育を受けたダヤンのようなインド男性が、自由恋愛に目覚めてイギリス女性に求婚することもありそうなことだった。またイギリス女性すべてが、人種差別主義者であったわけではなく、彼女たちの中には名門の出身で教育のあるインド人に魅力を感じてその求愛に答えた人物もある。¹²⁾ 無論、異人種のカップルはとりわけ英領インドでは白眼視された。『詩人が通る』に描かれているように、インド男性に嫁いだイギリス女性は、たとえ夫がエリートであっても、同胞からつまはじきにされる存在となった。イギリスの支配者たちは彼女たちや混血の子供を、ヨーロッパからの貧しい移民たちと同様、「白人であって白人でない」存在と見なした。¹³⁾ このような「白人性」を重視する人種観がイギリスとインドの融和にとって弊害になっていることは、作者の知るところであったが、旧ムムサーヒブとしてそれをあからさまに語ることは憚られたに違いない。そのために、彼女はローズから結婚を拒否されたロイの苦悩を通して、この問題を提起したのであろう。

11) Ann Stoler, "Carnal Knowledge and Imperial Power: Gender, Race, and Morality in Colonial Asia", *Gender at the Crossroads of Knowledge: Feminist Anthropology in the Postmodern Era*, ed. by Micaela di Leonardo (Berkeley, University of California Press, 1991) 72-74参照.

12) MacMillan, *op. cit.*, 215-17 参照.

13) この点に関しては、水谷智著「白人であってそうでない」者たち—イギリスのインド支配と白人性の境界」、藤川隆男編『白人とは何か？—ホワイトネス・スタディーズ入門』（刀水書房、2005年）249-55頁参照.

V

ローズを通して「骨の髄までアングロ・インディアン」のエルトン夫人の混血に対す嫌悪感を知ったロイは、英領インドにおいては自分も「半カースト」と見なされる存在であり、「二重カースト」というアイデンティティーが両親や自分の勝手な思い込みだと認識するようになる。人種隔離の掟を吹き込まれたイギリス女性たちには、生まれや育ちが良くても「黒いインド人の血」が流れている彼は、結婚の対象にはなり得なかった。彼の両親の結婚の論拠になった「アリアの兄弟説」は、ラクシュマンを納得させてもアングロ・インディアンたちには受け入れられないものであった。混血故にローズとの婚約を破談にされる一方、イギリス男爵としてアルーナを妻として受け入れられないことに苛立ったロイは、「今まで誇りだった自分の混血性を、結婚への道を妨げる両刃の剣で、非難されるべきものである」と感じるばかりか、「打撃を和らげるような警告の言葉もなく、彼を悲惨な立場に追いやった両親を、とりわけ父親を許すのが難しいという気持ちにもなる」(F.S., 428)。自暴自棄になった彼は自殺したい衝動にもかられるが、内なる「西洋の声」に制止されて思い止まる：

ロイが危機的な瞬間に聞いたのは、西洋の声だった——ランスの声だった——その声は彼の頭の中で聞こえた：「心を苛立たせてはいけないよ、ロイ。生き続けろ！」

ロイは何とか4年間にわたる戦争を生き延びたので、その軍人の何気ない言葉にどれほど不屈の勇気が秘められているか分かっていた。それは勇気を与える命令のような響きをもっていた。(F.S., 430)

結婚問題に関して、ロイの「宿命的な窮地での決定的な要素」は西洋性であり、インド人の血が「彼を躓かせる石」であることは否定できない。確かにインドは彼にとって「仏陀の後継者」あるいは「白人」としての地位を与えられる場ではなかった。失望した彼は文学を通してイギリスとインドの融合を図るのは、「オックスフォード大学時代の傲慢な夢に過ぎない」と思うようになる。そもそも民族主義運動の高まる最中であって、様々な民族と利害関係が「ごたまぜになっている」インドを一つの国家と見なすことは困難であった。あらゆる問題は彼には大きすぎた。「インドに居場所はない」という思いに駆られたロイは、「イギリスだったら人々は違った感想をもつかもしれない」(F.S., 428)という気持ちを支えに、イギリスの故郷に帰る。大英帝国の本拠地に帰った彼は、期待通りタラとの結婚によって傷心を癒し男爵家の後継者としての自尊心とアイデンティティーを取り戻す。幸いにも幼い頃からインドに興味をもち、母親とも付き合いのあったタラは混血の彼を差別することもなければ、生まれてくる子ども顔の色を気にする様子もない。周囲には彼女との結婚を白眼視する親族や知人はいなかった。

最終的に男爵家に包摂されたロイの幸福な未来を予測させる『遠くを探し求めて』の幕切れは、彼がイギリスとインドの架け橋になることに失敗はしても、貴族趣味のあるイギリスの読者を安堵させたかもしれない。しかし、差別や貧困に喘ぐユーレイジアンには、階級性が人種差別の問題を隠蔽するような物語の顛末は歯がゆいものであったに違いない。実際に

彼らはモンターギュ・チェルムズフォードの改革 (1919年) によって、それまで独占を認められていた鉄道や電報局等の仕事をインド人に奪われるようになり、ますます苦境に追い込まれつつあった。¹⁴⁾ 作者には、そのような状況に対する認識が多少なりともあったのであろうか。1930年初頭に設定された『詩人が通る』の中で、一男二女をもつ男爵となったロイは、再びイギリスとインドの架け橋となる小説を書くためにインドへ舞い戻る。そこで彼は自らのアイデンティティーの分裂問題が単なる血の問題ではなく、インドとインドの対立に起因することを認識する。即ち、イギリスとインドの間に敵対感情がなければ、混血の精神状態や社会的立場は改善されるように思われた。しかし両国が乖離するようなことがあれば、彼の執筆活動は無意味になり、政治的にイギリス側に組していたユーレイジアンたちはインド人から迫害される懸念があった。彼らの苦境に対するイギリスの無責任な態度を遠慮なく批判したり、アングロ・インディアンに原住民との友好を促すロイの言葉には、そのような不安と同時に、生まれ故郷のインドを失いたくない作者の思いが投影されているように感じられる。しかし、「イギリスとインドを結びつける」という仕事は困難を極め、ロイは偶然出会ったグルの勧めによりヒマラヤ山麓に籠もって、自らの使命とイギリスとインドの理想的な和解案を冥想することになる。 つづく

* テキストには、Maud Diver, *Far to Seek: A Romance of England and India* (Boston, Houghton Mifflin, 1921), *The Singer Passes: An Indian Tapestry* (New York, Dodd Mead, 1934), *The Dream Prevails: A Story of India* (Boston, Houghton Mifflin, 1938)を使用した。本文中の括弧内の題名の省略表記、頁数はすべてこれらの版によっている。

14) Reginald J. Maher, *These are the Anglo-Indians* (London, Simon Wallenburg, 2007) 50-51 参照。

